

まどい

第188号

秋田県羽後町仙道中学校昭和30年卒

1955（昭和30年）創刊

2007年7月20日発行

186-0003 東京都国立市富士見台 3-6-404
tel/fax 042-574-8694 ・ 直 090-2332-4408

まどい編集室

http://www32.ocn.ne.jp/~madoi/
mal: madoi30s@cc.mbn.or.jp



美空ひばり という歌手

笑顔の銅像の写

真を紙面で見れば、歌うために生まれきた人だなあとしみじみ思う。暗く重いニュースが

毎日のように続くなか、意気分でも気が晴れるようだ。

夕刊に連載の「うたごころ」

る」。先日からこの歌を取り上げています。

知らず知らず歩いてきた、細く長いこの道・・・美空ひばりさんが亡くなる少し前に歌った「川の流れるように」である。

先日ひばりさんの誕生日であった。昭和12年（1937）の生まれ。健在ならちやうど70歳になる。まだまだ歌

声を聞かせてくれたかも知れず、52歳での逝去が今更ながら惜しまれる。

「歌は世につれ、世は歌につれ」というが、ひばりさんの歌は昭和の戦後という時代や、そこで

生きてきた人々の心に灯をともし続けた。

一人酒場で飲む酒は・・・。「悲しい酒」を自らの失意や落胆の友とした人もいることだろう。

勝と勝と思ふな 思えば負けよ・・・の「柔」を口ずさんで自分を叱咤したり励ましたりした人もいようか。

ひばりさんはこんな言葉を良く口にしたそうだ「美空ひばりには神様がついてるけれど、加藤和枝には神様がついていない」加藤和枝としての私生活は苦しみ相次いだ。だから数々の歌は作今薄らいでいるような人の情けや共感を一層運んでくれた気もする。

「でこぼこ道や、曲がりく

ねった道」も人生だと「川の流れるように」は歌う。ひばりさんは多くの心の中に生きていて、でこぼこ道で疲れる身をそっと押ししてくれるようである。

京都嵐山の渡月橋の近くに「美空ひばり館」が有ります。京都を訪れたある日、朝からゆうがたまでそこで過ごしたことがありました。しかもたった一人でした。一時閉館となりましたがい最近リニューアルで再館されたそうです。

ひばりさんはわたしたちと同じ年代で活躍してきました。それだけにひばりさんのうたの時代がそのまま思い出の記憶に重なります。同館の二階に有るDVDホールに腰を据えて絵をみながら流れる歌に唇をあわせながら長い時間過ごしてきま

した。「歌はよにつれ……」そのまま己の過ぎし日々思いを寄せたものです。

うしろがっけとめんぐり棒

見舞い帰省で見つけた仙道

高橋孝之助

東北地方も梅雨入りした六月二十三日実家の方で病人が出たと言ふ事で帰郷した。東海の蒸し暑さ

とは全然違うこの涼しさ、むしろ朝晩は寒いぐらいであった。

飛行機を降り直ぐに秋田大学病院に向かう。迎え

の兄の車で走るが周りの景色にただうっとりとし見とれてしまう。ことのほか目にしみる木々の青さ、野を渡る風のさわやかさ。帰郷した理由などいつか飛んでしまっていた。

その夜は兄の家に泊まり、翌二十四日田代の妹の所へ見舞い、そして西馬音内で姉と妹三人を見舞う。なん

と言うことだ義姉を含め四人。

ところがお夜は大友行君から食事の誘い、嬉しかったね。近くの大衆浴場に行き風呂に入りかけたら、なんと飯塚和雄さんがいた。行君が呼んだそうだ。風呂を出て三人でカンパイ！束の間のゆったりとした気分であった。二時間程飲みかつ話題はつきない。やわらか和雄さんが茶封筒を出しなんと中学校時代の写真を出したのだ。それは水澤先生の授業ふうけいで



真坂峠を越え風平を出ると、まず正面に飛び込んでくるのが「仙道中学校」今や「羽後ステンレス」の工場です。雨天体操場はそのまま使われています。道路から、背丈の何倍もあって見上げたあの土手。どうしたのかと思わせるほどの低さにおどろかされる。小学校の土手も同じです。歴史も視線も変わりました。40年50年の月日なのでしょうね。

あった。従って生徒は全員後ろ姿しか写っていない。当然白黒写真であるが死着ているものがいわゆるドンブク姿がほとんどどのなかで一人だけ詰め襟の服を着ている姿が写っていた。和雄さんが言った「このうしろがっけは俺のようだな」と。なんと懐かしいひびきた。当然しばらくはなんのことかと思いつい聞いてしまう。ワケが判ると本当に素晴らしくさえ思えてしまふからおかしい。



～小詰なる古城のほとり雲白く雄姿悲しむ～
この後ろがっけは俺のようだと飯塚さん。その前は友幸だべ。右が内藤だ、まえのでかい二人は丸いのは若雄で平たいのは金子健治だろう。なっじがしなァ



「高瀬ケアセンター」かつて私たちが42の「厄払い同級会」が行われた場所です。いまは「ケアセンター」として特別養護老人ホーム事業 通所介護事業・短期入所生活介護事業・認知症対応型共同生活介護事業 居宅介護支援事業・生活支援ハウス の拠点として活動されています。短期入所された西馬音内の友人も「友達も出来て楽しい時間を過ごすことが出来た」と言っていました。仙道の、そしてこの時代の新しい仙道の顔のようです。

仙道村の中央に、まるで小島のようにある、「八幡の森」長く仙道を離れているものにとっては、秋祭りなど賑わった頃のイメージとはまるで違って見えます。とはいえ長年の管理と保存は地元にとっては大変な事業でもあるようです。



もう一枚はもう一枚は水澤先生 叙勲のお祝いに集合した同級生たちの懐かしい顔が数人並んでいた。その写真をいただいてさよならした。

りに歓迎されるも喜びもいまい。しかしその夜感動が一つあった。なんとホタルが飛んでいたのだ。川などでもずいぶんきれいなホタルも蘇ったのだ、首が疲れるほど見上げていた。

聞いた「なんだ忘れたか」と兄。忘れもするわナ。まだまだ沢山なつかしい言葉が出たなア、何十年も聞かないし使わないから忘れるわけです。

六月二十八日。

年寄りのグチ……
なつなつ 「前の会社」
「うちの会社」小さがるうが 大きがるうが、自分の働いている会社のことだ。嫌なこと多いが俺がいま働いている会社だ。いずれ大会社に。そう思っているも今はこの会社で働いている。

かつてはそんな自分を誰も が持っていた。だからこそ会社を非難されると頭に来る。働くと言うことは一つにそんな所もあったのだ。
いま会社のユニホームがそのまま会社の看板と思っている人がどれくらい居るだろうか。
「言われたことをやって給料をもらえばいい」
派遣従業員は、その現場から指示を受けることはないその日その日与えられた仕事を時間内にやるだけだ。明日はどうか判らないが今日の給料は今日貰える。愛社精神どころか製品にたいしてさえ愛着をもてない。
時代が変わったという。いや、これは時代が変形したとしか言いようがない



若いとき ありましたわ

まどいホームページ「同級会写真集」より

上の写真は1957年昭和32年のもので同級会としての最も古い写真です。

下は2007年。今年新年会に集まった同級生でもっとも最新の写真になります。その時間差なんと半世紀50年。やッ写真も天然色だなどとお互いにのんきなことも言えないほどの変化をふんでいます。

年齢にして18歳、かたや68歳になんなんとしています。

上の写真では、すでに4人の同級生が亡くなっていますが、下には健在でみなさん頑張っています。

さて、上のどれが誰なのでしょう。50年の歳月をたどってみてください。



編集手帖

皆中お見舞い申し上げます。

全国の同級生の皆様おげんきでお暮らしのことと思います。

少なからず不安となつてさえ来ました。やがて座布団を暖めるころになって、それでも出来ることをやっていこうそんな心境に至っております。

今年はずいぶん梅雨らしい梅雨を迎えているようです。しかし梅雨のさなかに西では台風に見舞われ、甲信越ではまた大きな地震に見舞われてしまいました。国では年金問題大幅な増税や憲法改正の問題社会現象一つ一つが私たちの生活に直接影響してきております。もはや高齢者と言われる私たち、出来ることならよいことばかりを探して安らかな日々を暮らしたいものです。

やがて「古稀」も近づいて参りました。今や萎えてゆく体力を認めざるを得ません。筆者の「まどい」に掛けた一生もその力不足が

皆様のお便りをお待ちしています。日常のふとした出来事・思うこと・言いたいこと。写真でも絵でも何でも良いです。

編集室または、孝之助宛お願いします。